



## 第九卷第八號

水を喫て

小杉 樞 郎

古きふみ見るに、四月より九月頃まで、主水司、日々これに奉りて、おもの、そのほか暑氣さくる用に、あてさせたまひよしなり。そのこれな野へし處も、何の山、くれの野などより、からくも得つるよしなるを、此頃は北邊の國を始めて所々よりこの都に運び來て、ちまたことにひさぎて、下が下までも、いと得安げにもものするのみならず、門邊によばりゆく其壁きいて、まづ暑さ淺がる心地す。けふも例の晝間に一ひつをけつりて、砂糖かてり、水すこしさしそゝぎてうちのむ、それをや氷水とむかしいひけんな。この砂糖おしなべたらぬそのかみは、甘露煎やならうちそゝぎぬとか。今は一日これなくば、この頃をいかでとけてもくらさましなど、おほゆるまで、げに氷室のくまび、うちひらけ來し御代にもあるかな。

めしよせて今日のあつさをけつり氷の  
むかし身にしむおものなりけり